

(別紙2)

審査の結果の要旨 氏名 喜屋武 盛也

本論文は、エルンスト・カッシーラーの主著『象徴形式の哲学』（第一巻一九二三年、第二巻一九二五年、第三巻一九二九年）の形成と展開を扱った体系的な研究であり、大きく二部からなる。

第一部「『象徴形式』から『象徴機能』へ」は、まず『象徴形式の哲学』に見られるカッシーラー独自の「象徴形式」の概念を、その発端としての『実体概念と関数概念』（一九一〇年）から辿り直す（第一章）。その上で、「象徴諸形式」（神話・言語・認識）を認識の展開のうちに位置づけるという『象徴形式の哲学』第三巻「認識の現象学」の構想がすでに第一巻成立時に認められること（第二章）、第三巻の提起する「表情機能」「表示機能」「意味機能」という三つの「象徴機能」が「象徴諸形式」の多元的な把捉を可能にしたことを示し（第三、四章）、さらに、第三巻に見られる「象徴の懐胎」という概念が人間の認識の基層にかかわることを解明する（第五章）。

第二部「『象徴形式の哲学』における『芸術』の位置」は、当初から「象徴形式」の一つとして言及されながらも『象徴形式の哲学』においては独自の「象徴形式」として論じられることがなく、最晩年の『人間』（一九四四年）において初めて主題的に論じられることとなった「芸術」について論じる。著者は、『象徴形式の哲学』第二巻において「神話」があらゆる「象徴形式」の母胎と見なされたことを踏まえ（第六章）、『人間』のカッシーラーが「芸術」を、神話的なものから次第に独立したものとして、かつ、表情的なものと表式的なものとの「均衡」という独自の特質を持つものとして捉えることによって、象徴形式の哲学のうちに「芸術」を体系的に位置づけることができたことを明らかにする（第七章）。続く第八章は、「遠近法」を象徴形式の一つとみなすパノプスキとカッシーラーとの間の相互的影響関係を解明する。以上の考察を踏まえ、カッシーラー哲学は「言語」「神話」「芸術」「認識」という象徴諸形式を提起する点においてのみならず、個々の象徴形式の内部にも複数の体系が並立することを認める点において多元主義的特質を有していること、そして、彼の多元主義な理論構成が彼の芸術論の展開と密接に結びついていることを、著者は最後に強調する（第九章）。

カッシーラーの新全集の公刊とともに活発化した一九九〇年代のいわゆる〈カッシーラー・ルネサンス〉は従来のカッシーラー像に根本的な変容をもたらしつつあり、本論文もまた、新全集において新たに公刊された資料を駆使して、カッシーラーの「象徴形式の哲学」の成立過程に明快な道筋をつけようと試みるものである。カッシーラーの独自の諸概念がいかなる出自を持つのか、というカッシーラー哲学の生成の形式的な面に議論を限定するあまり、個々の概念の内包についてなお十分な検討が加えられていない点が惜しまれるが、これはむしろ本論文を踏まえての今後の課題とみなすべきであろう。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。